



Title	19世紀中葉パリのプチ・ブルジョア : その生活とステイタス・シンボル
Author(s)	福本, 逸美
Citation	études françaises. 1983, 19, p. 107-135
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/93666">https://hdl.handle.net/11094/93666</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 19世紀中葉パリのプチ・ブルジョア

—その生活とスティタス・シンボル—

福 本 逸 美

## はじめに

フランス社会は、1789年の革命を媒介に、旧制度の身分制から19世紀の階級による分化へと、構成上の転換を見た。貴族と民衆そして両者間に位置するブルジョアジー、これらが各自ひとつの、あるいは複数の階級を形成していたのである。

ブルジョアの世紀とも呼ばれる19世紀に、主導的な役割を演じていたのは、勿論、ブルジョアジーであったが、これは決して均質な一グループではなかった。日常語の領域でもすでに、大ブルジョアジー・中ブルジョアジー・小ブルジョアジーという、主に財産の多寡の点から成される簡単な区分が見られる<sup>(1)</sup>。

ドーマールは、職業・財産額・生活レベル等の多方面から行なった、19世紀パリのブルジョアに関する研究のなかで、パリ社会をいくつかの層に分けているが、それによるとブルジョアジーはより細分化されている<sup>(2)</sup>。

貴族階級 *aristocratie nobiliaire*

ブルジョアジー諸階級

- A 金融特権階級 *aristocratie financière*
- B 上層ブルジョアジー *haute bourgeoisie*
- C ボンス・ブルジョアジー *bonne bourgeoisie*
- D 中層ブルジョアジー *moyenne bourgeoisie*
- E 民衆的ブルジョアジー *bourgeoisie populaire*

民衆 *peuple*

大産業家・銀行家を中心に実質的に社会を支配していた、ブルジョアジーのなかの特権階級Aと、これとは緊密な関係にあるが、強力な決定権も操縦力も持たないBが、本来の貴族とともに上層階級を構成する。ドーマールは、貴族を、パリにおいては社会階層の頂上に位置するというよりむしろブルジョアジーの上層部分と同列にあると考えている。一方、Dを中核に、上下CEへの浸透部分を含む全体は「中間階級」*classes moyennes* としている。そして、人口の大多数を占める民衆が、Eとの不明瞭な境界の下で、社会階層のピラミッドを支える広大な底辺となっていたのである<sup>(3)</sup>。

ロムによれば<sup>(4)</sup>、ブルジョアジー諸階級間の力関係は次のようである。1830年まで支配階級であった土地貴族は、七月革命で大ブルジョアジーにその権力を奪われた。七月革命の実戦力であった中小ブルジョアジーと労働者を排除して、この階級が勝利の成果を独占できたのは、以前から蓄積していた貨幣力・産業における強大な経済力と、「貨幣の力」をいちはやく見抜いた洞察力の鋭さゆえであった。経済力を基礎に、政治的社会的上昇をも遂げ、権力の座についた大ブルジョアジーは、(1)「労働し」、(2)「特に報酬の多い活動に従事し」、(3)「大収入を得ている人々」<sup>(5)</sup>として特徴づけられる。(1)(2)により旧土地貴族と、(3)の点で中小ブルジョアジーと区別されるのである。

一方、富の差異によって大ブルジョアジーから分離され、また、この階級に裏切られ屈辱を味わった中小ブルジョアジーは、18年後の二月革命で労働者階級と結束し、上層階級に立ち向かう。しかし、七月革命と同様に無視されることを危惧した労働者たちの脅威が、今度こそ自分たちの手に権力を、と望む彼らの野心を挫折に終らせた。この結果、再び大ブルジョアジーが覇権を握り、中小ブルジョアジーには恨みと不満が鬱積してゆくのである。

このように、ブルジョアジーは、さまざまな点で相異なる複数の階級か

らなるものであった。それを中心勢力として成立する19世紀社会は、さらに、階級概念の曖昧さから、一層複雑なものとなる。なぜなら、「階級」は、旧制度の「身分」とは異なり、明確な境界線をもたないからであった。ロムのいうように、「諸階級は理論的には開かれて」いて、「法律上のいかなる障害も一階級から他の階級への移行をさまたげることはなく」なり、その結果、階級間移行という現象がしばしば生じる。こうして「諸階級をわかつ境界はひじょうに不明瞭な、純粹に事実上の境界」<sup>(6)</sup>となるのであった。またドーマールは、社会を上層階級・中間諸層・民衆に三分するとき、それらは完全に分離されるものではなく、相互間での浸透は可能で、それぞれは他との隣接部分で魚鱗のごとく重なりあっているという<sup>(7)</sup>。このことは、ブルジョアジー内部の諸階級についても同様であろう。

このように、19世紀のパリ社会は構造上かなり複雑で、その階級区分は下層になるにつれ不明確さの度合を増すものであった。そなかで、数と影響力の大きさから重要な位置を占めていた大中ブルジョアジーと、人口の圧倒的多数からなる民衆との間に置かれる小ブルジョアジーの立場もまた、不安定で曖昧模糊としていた。本稿では、このパリの小ブルジョアジーを対象とし、その生活態度・意識のあり方について述べようと思う。

## I. パリのプチ・ブルジョア

幾人かの研究者が掲げるプチ・ブルジョアの職業・身分は、ほぼ次の3つに分けられる。(1)小商店主・小企業主・職人の親方、その他(自由業従事者の一部等)、(2)公職・私企業・商店等のさまざまな「給与生活者」*employés*、(3)小金利生活者、である。

(1)は、主に、「主人あるいは雇主」*patrons*として独立の地位を有し、下層階級の客から得た利益で暮らす人々である。ある者は、家業とともに地位をも相続した代々のブルジョアであり、中ブルジョアジーを含めると、パリの店主の $\frac{1}{4}$ 、卸売商の $\frac{1}{3}$ が、それぞれ店主・卸売商の子孫であった<sup>(8)</sup>。

しかし、一方、これらの数字は、新しく主人・雇主となったものの数の多さを示してもいる。主人のもとで働き、資金を貯えながら、一定の見習期間を経たのち、被雇用身分から独立した身分への上昇を遂げたものたちである。地方からパリへの人口流入が増加するなかで、特に地方出身者が高い比率を占めていた。仕事上の知識があれば、他の教育は必ずしも必要ではなかったから、この種の社会的上昇は比較的容易だったと考えられる。小企業主・商店主等として、多くの「新人」hommes nouveaux が登場したであろうことは、営業税納入者数急増の事実から明らかである。それは、1827—80年間に倍増し、特に七月王政・第二帝政の各時代における増加は著しい<sup>(9)</sup>。

(2)は、人に雇われ、賃金で生活するものである。給与生活者の身分は民衆と共有されるものであり、より下級の職種の者が民衆に、より上級の職種に従事する者が小ブルジョアジー以上に属するのであった。19世紀における商工業の発展および社会発展は、さまざまな分野での職種の多様化と人員増加の起因となった。たとえば、行政職は、1840年からの40年間に2倍になっている<sup>(10)</sup>。下級公務員あるいは私企業の工場監督・技師等、多少とも責任のあるポストで、プチ・ブルジョアは活躍したと考えられる。

(3)の金利生活者の多くは、長年の労働ののち働かずに余生を送るに足る貯えをなして現役を退いた、上記(1)(2)のものおよびその未亡人、また、元主人から終身年金を受けるかつての奉公人たちであった。労働経験の全くない真の有閑人は、この階級ではほとんど見られない。

次に、明確な範囲設定はできないが、プチ・ブルジョアの年収や財産額の概要をみておきたい。ドーマールは1847年の相続財産記録をもとに、いくつかの職業に関してそれらに従事する者の各財産レベルでの人数分布を調査したが、そのなかから店主・給与生活者・卸売商人を抜粋したのが表Iである。店主に関しては、1万フランを頂点とした裾野の広いなだらかな山型となる。店主が最多数だったのは中ブルジョアジーであり、小ブル

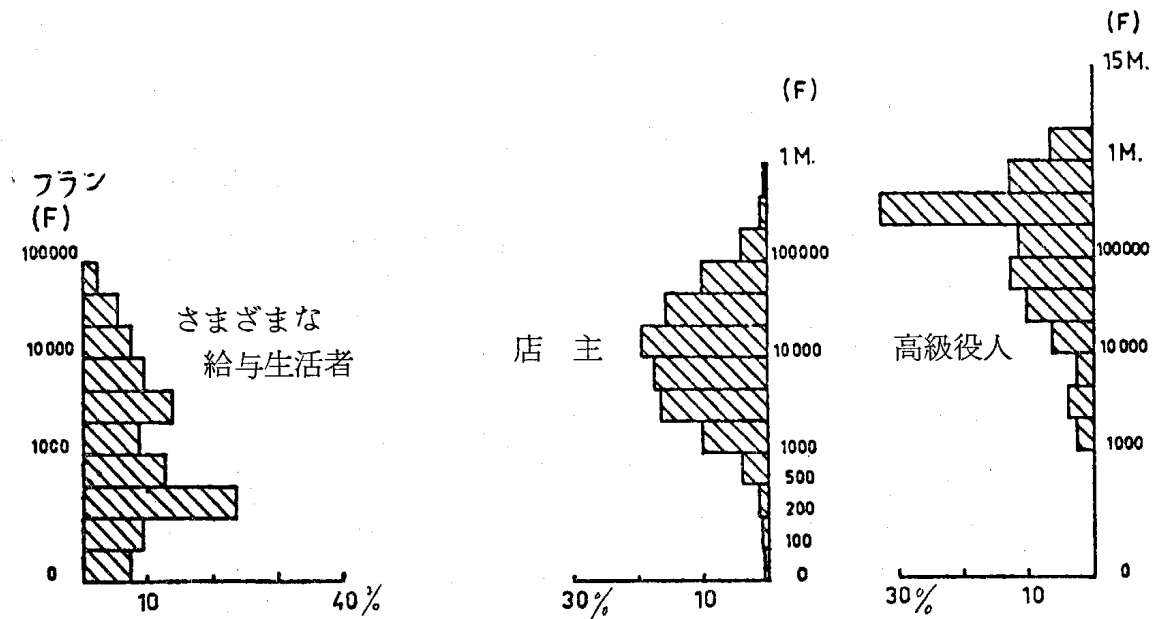
表 I 各職業の財産別人数分布

職業	財産額 (単位：フラン)														合計 人数	
	100 以下	100   200	200   500	500   1000	1000   2000	2000   5000	5000   1万	1万   2万	2万   5万	5万   10万	10万   20万	20万   50万	50万   100万	100万 以上		不 詳
店主	1	3	9	21	58	98	110	118	95	57	20	5	2		15	612
旧店主			2	3	4	2	9	4	7	6	9	6	1		1	54
さまざまな給与生活者 (employés divers)	16	18	51	27	18	30	20	18	12	5					5	220
国家公務員 (employés de l'Etat)	1	4	20	25	32	24	23	30	50	24	12	11			8	264
卸売商人				2	1	1	5	7	5	9	25	17	5	...5	8	90

A. Daumard, B. P., pp. 364-365 より抜粋

ジョアジーの店主は多少規模が劣るから、後者のみでは平均財産額はややくないと考えられる。給与生活者は、低い財産額のところで広く分散し、民衆とプチ・ブルジョアの双方を含んでいる。ただし、国家公務員の場合はやや多くの財産を所有していた<sup>(11)</sup>。ちなみに、中ブルジョアジーを主とする卸売商人の財産は、1万~50万フランに集中している。また、上層階級に多い高級役人では、かなり多額の財産となった(グラフ I 参照)。

グラフ I 1847年パリにおける各職業従事者の財産額



A. Daumard, H. E., p. 888.

一方、ブルトンによると、セギュール伯爵夫人は、第二帝政のプチ・ブルジョアの何家族かは10万～20万フランの財産を所有していたという<sup>(12)</sup>。

では、年収についてはどうだったか。セギュール夫人は、中産階級に属するためには最低約3,000フラン必要と考えていたらしい。夫人のあげる例では、工場長3,000フラン、銀行支店長4,000フラン、プチ・ブルジョアの2人の地主それぞれ5,000フラン、1万フランである。一方、夫人は、年収3万以上を上層階級とする。たとえば、大ブルジョア2人は8万フランと30万フラン、大工業家は120万フランであった<sup>(13)</sup>。ドーマールは、2,500フランの年収は民衆との明確な区分になると述べている<sup>(14)</sup>。

モログによると、労働者5人家族の最低限度の生活には、1830年頃で860フラン必要であり、公式統計は1840年における労働者家族の最低必要額を950フランとしている<sup>(15)</sup>。また、マルタン=フュジエに従えば、4人家族の労働者家庭では1871年で1,130フラン、1880年で1,200フラン必要であった<sup>(16)</sup>。これらの額に比べると、プチ・ブルジョアの年収の最低ラインである2,500～3,000フランは、ある程度の余裕を示すものとなる。

以上、職業・財産・年収の点からプチ・ブルジョアの地位を概観してきた。年収が家計にどのように配分・使用されていたかという問題は次節に譲るとし、次にプチ・ブルジョアの行動様式とそれに作用していた意識構造を探ってみたい。

ブルジョアジー全体についていえることはプチ・ブルジョアにもあてはまる。まず、特に商店主・企業主等の場合で明らかのように、人生における成功、地位の上昇をめざす傾向が強かった。そのため、ブルジョアは勤勉になり、儉約に励み、自分の努力と労働だけに頼ることから一種の個人主義を抱くようになる。また、結婚・子供の数・教育等の家庭問題に慎重な態度で臨んだ。良き結婚は、独立資金となるであろう妻の持参金に加え、妻の能力または労働力、新しい人間関係等の利点を伴う<sup>(17)</sup>。子供の教育に関しては、その差は民衆・ブルジョアジー間の障壁となり、ブルジョア

ジー内部では階級レベルの指標となるから、重要な問題であった。民衆からブルジョアジーへの上昇は、数世代を経て、子供に高等教育を受けさせバカロレアに合格させたときに完成する<sup>(18)</sup>と考えるものもいた。他方、築きあげた財産の、分割による減少を抑えるために——また、教育費用の問題もあろうが——、子供数を少なくする傾向が見られる。ブルジョア家庭では、子供は多くの場合、1人か2人であった<sup>(19)</sup>。

さて、当時の民衆の生活は極めて貧しく、モログは労働者の最低必要経費について語るとき、一家全員が働いてもそれに満たないものが多いと指摘する<sup>(20)</sup>。人口の大多数を占める民衆のうち、ブルジョアに上昇してゆく少数の例外を除いて、その日暮しが民衆の一般的な生活スタイルであった。自分の埋葬料15フランさえほとんどが残していなかった民衆の関心はその日の生活に限られていたのである。この窮迫した状態に対し、成功への意欲、勤労・儉約の重視、将来に備えて自らの現状や家族の問題に払う多大な関心——これらはブルジョアの意識構造、生活態度を特徴づけると同時に、プチ・ブルジョアを民衆から画然と引離すものであった。

さらに、その階級上の立場がプチ・ブルジョアにとらせることになった行動も見逃せない。民衆と接するがゆえに、他のどの階級にもましてプチ・ブルジョアは、民衆から区別して見られることを願い、民衆的状态から距離を保つことに熱心になった。他方、上位の階級に対しては憧憬と羨望の念を抱き、自らもそれに属すことを、少くともそれに近づくことを望む。上下の階級に対するこうした思念が、プチ・ブルジョアを上層階級の模倣と、見栄・見せびらかしに走らせることになった。

無論、上位階級の模倣や見栄の傾向は、いつの時代でも、どの階級でも見られるものである。しかし、階級の断層が決定的でなく、階級間移動が激しい社会にあっては、この傾向は一層高まり、自らの成功と優越を一目瞭然に示さねばならない。富はただ所有するだけでなく外部に示す必要がある。有閑階級や上層階級はそのために、衒示的閑暇・衒示的消費<sup>(21)</sup>の

手段を利用した。前者は働く必要がないほど富裕だということを、後者は最高級のものに惜しみなく財貨を費消できる能力を、誇示することである。本人・家族で不十分な場合は奉公人や競争相手をも動員した。多数の奉公人にりっぱな仕着せや住居を与え、ほとんど仕事をさせずにおいたり、大勢の客を饗宴に招いたりするのは、他人の助けを借りて自分の富と消費能力を示す、代行的閑暇・代行的消費であったのである。

ところが、社会の階梯を下がり、中小ブルジョアジーになるとようすは多少異なる。ここでは勤勉が美德とされ、また必要なものとなり、閑暇の重要性は減少してくる。しかし、「出生・名・先祖からしてもともと優れている貴族と違い、ブルジョアは自分に対しても他人に対しても常に証拠を示さねばならず、社会的認可を常に必要とする」<sup>(22)</sup>不安定な地位にあるため、やはり富の誇示は避けられない。ブルジョアジーの最下層にあって、時に民衆と同化される小ブルジョアジーについてはなおさらである。その結果、下層ブルジョアジーにおいては、衒示的閑暇より衒示的消費に比重が置かれることになった。

プチ・ブルジョアが消費能力をいかに誇示したか、外見のために払う努力は日常生活でどのような形をとって現われていたか、これらの問題を以下の課題としたい。

## II. プチ・ブルジョアの召使雇用

表Ⅱは、第二帝政社会の、所属階級の異なる3家庭の年間家計を示したものである。これによると、項目別で階級間に大差があるのは、諸雑費を無視すると住居費である（②は①の約11倍、③は②の5倍）。また、③の衣料費が②の10倍であること、①にはない召使費用が②③では見られることも注目に値する。

住居はブルジョア生活の大きな規準であった。家賃額によって民衆以外の人口比率を算出するとき、ドーマールは、動産税免除の対象となる200

表Ⅱ 3つの家計

家族 構成  項目	①		②		③	
	労働者家族 (4人：両親と 子供2人)		小ブルジョアジー (4人：両親, 子供1人, 召使1人)		裕福な ブルジョアジー (4人：夫婦と 召使2人)	
	フラン	%	フラン	%	フラン	%
食費	1100	73.33	2500	41.66	6500	18.57
衣料費	250	16.66	1000	16.66	10000	28.57
住居費	90	6	1000	16.66	5000	14.28
諸雑費	60	4	900	15	12000	34.28
召使費用 (給金と心付)	なし	0	600	10	1500	4.28
計	1500	100.—	6000	100.—	35000	100.—

P. Bleton, *op. cit.*, p. 76.

フラン以下の家賃支払者と、201～399フランの家賃支払者は赤貧・貧困の状態にあり、400フラン以上を払う者だけ（全体の約20%）が民衆の上に位置すると考える（19世紀前半）<sup>(23)</sup>。これからすると、プチ・ブルジョアは一般的には、家賃400フラン以上の住居に暮していたことになる。また、プレシは、第二帝政社会について、ブルジョアの見せびらかしの第一手段として住居をあげ<sup>(24)</sup>、ブルトンも、ブルジョアは第一の、かつ最大の努力を住居に向けると指摘している<sup>(25)</sup>。

しかし、プチ・ブルジョアに関しては、住居状況はそれほど優れていたと思われない。たとえば、年収3,000フラン（勤め人の夫の給与2,400フランと妻のピアノ教授料600フラン）で子供3人のコトン家は、女中に500フランの給金を払い、800フランのアパルトマンに住むが、部屋数は4～5であった<sup>(26)</sup>。また、年収1,000フランの金利で暮らす未亡人は女中を雇い、2部屋と台所、化粧室付のアパルトマンに住んでいた（19世紀前半）<sup>(27)</sup>。一方、19世紀前半には、パリの家主は、店主を中心とする中産階級に多かったが、後年次第にこの階級のとりわけ下層部分で家主数が減少していっ

た<sup>(28)</sup>。従って、プチ・ブルジョアの多くは部屋数の少ない賃貸のアパートマンに住んでいたと考えられ、住居面での見せびらかしはあまり可能でなかったと推察される<sup>(29)</sup>。しかし、狭い空間——一部屋きりのアパートマン、不潔なあばら屋のような住居や貧民宿——に、最低限の家具もなく寝起きしていた民衆とは格段の差ではあった<sup>(30)</sup>。

ところが、上述の2つの例と表Ⅱのプチ・ブルジョアを見ると、決まって召使を雇用していることがわかる。表Ⅱのプチ・ブルジョアは、家計費全額に6,000フラン、住居費にも1,000フランをあてているから、より恵まれた地位にあったといえるが、食費は40%とかなり高率である。それは召使の食費を含むものであり、また、接待費用等が含まれている可能性もある。しかし、この程度のエンゲル係数の家庭や、さらに年収の劣る他の2つの家庭でも召使を雇っている点は重要である。

小売商や小企業主の多いプチ・ブルジョアでは、妻の労働力も家業に必要であったからとも考えられるが、最大の理由はやはり、上層階級の模倣、外見のためであろう。上層階級では奉公人の数は主人の地位の象徴であり、「召使のおもな効用は、主人の支払能力を証明することである」<sup>(31)</sup>からだ。こうしてプチ・ブルジョアは十分な余裕がない場合でも上層階級をまねて召使を雇い、「見栄の出費」をすることになった。奉公人のいないブルジョアの生活は考えられないのである<sup>(32)</sup>。

プチ・ブルジョアが「ブルジョアである」ために雇ったのは、奉公人中最低のランクに置かれ、当然給金も最少ですむ「下女」bonne à tout faireであった。仕事の専門化した他の召使——料理女、小間使等——や、見せびらかしの効果は高いが同時に費用も高くなる男子奉公人は、実際、手の届くものではなく、たとえ余裕があっても儉約の精神に反するものであった。儉約と階級の見栄の妥協から、ひとりで何役も兼ねる下女の雇用の一般化が生じたのである。マルタン＝フェジエは次のように述べる。「召使の需要は増加し、供給をはるかに上回っていたが、それは小間使、料理

女等の専門的召使についてではなく、単に下女だけに関することであった。その雇主はプチ・ブルジョアだった。<sup>(33)</sup>「19世紀後半には、生活水準の一般的向上、プチ・ブルジョアの数の増大の結果、これらの家庭での下女の雇用が一般化する。」「少なくともひとりの女中をもつことは社会的シンボルである。それは自分がブルジョアの側にいるというしるしなのである。……貧しさは、女中のいない所から始まるといえるだろう。」要するに、プチ・ブルジョアにとって下女は「社会的上昇の第一のしるし」<sup>(34)</sup>、プロレタリアでなく「ブルジョアであることのしるし」なのであった<sup>(35)</sup>。

奉公人の種類の多様さ、明確な分類の困難さ（たとえば、商店主に雇われ家事と店の用の両方をするもの等について）などの理由から、女中の数を算出するのは容易でない。しかし、召使の男女比の変化状況は、下女の増加の傍証になるだろう（表Ⅲ<sup>(36)</sup>参照）。

ここで、プチ・ブルジョア家庭での下女の立場を調べることから、主人であるプチ・ブルジョアの姿を探ってみたい。まず、給金について。ドーマールは、サン＝マルタン通りに住む卸売商人の生活レベルをあげる際、召使の給金は300フランと述べている<sup>(37)</sup>。ブルトンによると、給金は300フランだが、衣食住の現物支給分は金額にして約600フランになった<sup>(38)</sup>。召使の年齢や労働年数等によって個人差はあるが、1880年の統計をもとに、マルタン＝フュジエは召使の給金を簡単な表にまとめている。それからパリの召使に関する箇所を抜粋したのが表Ⅳである。この表では、下女と他の召使の給金の差はわからないが、19世紀末について見ると、下女の給金は他のものより少なかったことがわかる（表Ⅴ<sup>(39)</sup>参照）。

衣食住が一応保証されていた点から考えて、下女は一般女子労働者より

表Ⅲ 召使100人中の男女の比率

年	男	女
1851	31	69
1872	29	71
1881	27	73
1891	24	76
1896	19	81
1901	17	83

A. Martin-Fugier, *La place...op. cit.*, p. 35.

表IV パリの食事付召使の年間給金

性別	召使の種類	給金額 (フラン)		
		ふつう	最高	最低
女	主人付女中	500	600	300
	料理女	500	600	300
	両方の仕事を兼ねる者	500	600	300
男	主人付下男	600	1000	400

(1880年の統計より)

A. Martin-Fugier, *La place...op. cit.*, p. 81 より抜粋

表V 女子の召使の給金 (フランス全体について)

召使の種類	給金 (月額: 単位 フラン)			
	1884年	1897年	1898年	1910年
下女	20.5~33	60	25 ~ 40	30 ~ 60
小間使		40 ~ 75	40 ~ 60	50 ~ 70
料理女	22 ~ 36		50 ~ 60	50 ~ 70
乳母		75	60 ~ 80	50 ~100

F. Fay-Sallois, *op. cit.*, p. 265 より抜粋

は恵まれていたといえるかもしれないが、下女の地位は悲惨なものであったようだ。第一に、最も少ない給金で最も多くの仕事をこなさねばならなかったのである。朝6時から深夜までの休む暇もない労働が下女の日課であった。加えて、当時の住宅、特に下層階級の住宅における水道・水洗設備の欠如、部屋や台所の狭さと配置の悪さ等の問題は、召使の労働を一層厳しいものにしていった。

住いについては、主人の住居内に暮らす場合と、アパートの最上階に設けられた召使用の部屋に寝起きする場合の二通りがあったが、いずれも悪条件に満ちていた。第一の場合では、小さな鉄のベッドはあるが通風が悪く狭い物置のような部屋であることがしばしばだった。一方、第二の方法

が習慣になりつつあった最大の原因は、19世紀後半の地価の急騰にあったらしい。狭い土地の有効利用のためから高層の建物が増加し、昇降の不便な最上階が召使に当てられることになったのである。また、オスマンの大事業の結果、パリに裕福な地域と貧しい地域が分離したように、建物内部でも召使たちの貧しい最上階と主人たちの裕福な階という上下の区別がなされたともいわれる。いずれにせよ、こうして最上階には、費用を安くあげるために最悪の造作で狭くて天井も低い、人間の生活に適當とはいえない独房のような部屋が多数、番号付のドアを廊下に向けて並ぶことになった。一般に「7階」le sixième étage と呼ばれるこの階は、道徳的にも衛生的にもしばしば問題の発生源となり、人々に怖れられ危険視されていたのである<sup>(40)</sup>。

さらに、下女は精神的にも虐待を受けていた。プチ・ブルジョアにとって、特に民衆出身者にとって、「女中は階級の敵であり、永久に自分の出自を思い起こさせるものであったのである。」<sup>(41)</sup>そのため、主人たちの下女に対する態度は高圧的かつ意地悪なものとなり、多くの命令により下女を苦しめることで、階級的自負を満足させていた。昔の主人が持っていた威光を求めて、狭い住居では不必要な「呼鈴」が使われもしたが、それは主人に対する召使の服従の象徴だったのである<sup>(42)</sup>。

ギュトンには、給金の額より主人の身分が召使の状態を決定するといっているが<sup>(43)</sup>、下女はプチ・ブルジョアの見栄の一手段としての性格が大であったため、物質面・精神面において二重に悲惨な状態に置かれることになった。このような下女の待遇のなかに、民衆との間に差を求め上層階級を羨望し、それゆえ、狭い住居・低収入でも階級的しるしを必要としたプチ・ブルジョア精神がかいま見られるといえよう。

下女と異なり、奉公人のなかでも多くの点で特権的立場にあった乳母は、一層主人の富を示すものであった。乳母は必ずしも必要なものといえないが、上流階級では特に、母親が自分で授乳するのは社会的慣行に反するこ

表VI 乳母の契約状況

斡旋者	乳母の種類	乳母数	斡旋形態	雇用主
グラン=ビュロー		504	「養護児童」 Enfants assistés	貧困者 赤貧者
		1470	「自由斡旋」 Placements volontaires	中産階級 職人, 商人
プチ=ビュロー	「田舎乳母」	9042		
	「住込乳母」	2842		ブル ジョア
直接的雇用		?		

F. Faÿ-Sallois, *op. cit.*, p. 71. (1865年の統計から作成)

とと考えられていた。19世紀半ば、2万～2万5千人のパリの子供が他人に授乳されており、1866年の新生児は5万3千人であるから約半数ということになる<sup>(44)</sup>。

表VIが示すように、乳母の種類と雇用方法にすでに階級差が見られる。乳母を雇うには、「グラン=ビュロー」Grand Bureau, 「プチ=ビュロー」petits bureaux という斡旋事務所を通す方法と、個人的に捜す方法（医師の紹介、自分の所有地で、等）があった。後者の場合は、その方法ゆえに確かな数字はわからない<sup>(45)</sup>。グラン=ビュローは市の運営する事務所だが、かつての個人斡旋屋による私立のプチ=ビュローが増加し、競争に生き残るため、貧困者を主な対象とするに至った。この状況のなかで、ブルジョアは階級的誇りのためグラン=ビュローから離反していったのである。

乳母のうち最も多いのは、子供を田舎の自宅へ預って帰り養育する「田舎乳母」nourrice à emporter だが、それには、住居の狭さと不衛生、子供の世話と農作業の二重労働、無教養、パリから田舎までの道程の危険等の問題があった<sup>(46)</sup>。これらの問題を避けるために、裕福な親は、約2倍の費用を要するが<sup>(47)</sup>、常に手元で子供の安全を確認できる「住込乳母」nourrice sur lieu を雇うことになる。当時の観察者は次のようにいう。「40年前は金持ちの御婦人か、病人や病弱で子供に授乳できない女性だけが乳母を雇い入れていた。しかし、今日では状況は変っている。いくらか余裕の

ある家庭はみな、自宅に乳母を雇おうとするのである。従って、『住込乳母』産業がここ数年来、信じられないほど発展した。<sup>(48)</sup> ファイ=サロワは、この流行は土地とのつながりのあまりない、新しい商工業ブルジョア層の出現と発展に一致すると指摘し、また、「ブルジョア家庭において、住込乳母は、第二帝政に一般的となった『外見的必要』 *besoin de paraître* の性質を帯びるものであった<sup>(49)</sup>と主張する。つまり、住込乳母の雇用は、「ブルジョア的安楽の決定的一要素」であり、「富を実際以上に見せる外的しるし」なのであった<sup>(50)</sup>。

さらに、その服装は1880年頃から特徴的で目立つものとなる。「(フランスの)乳母はローブと、授乳が容易なように前で小さなボタンで閉じられるようになった黒っぽい色の胴着を着ている。ローブと同色の長い外套が足もとまで届く。大きな結び目を作った糊のきいた白襟と、大きなピンでとめたひだつきの冠型帽子との間に広い顔がのぞき、帽子からは大きなリボンが垂れて風になびいている。背負いひもと白か黒のエプロンが、彼女の衣裳の仕上げをする。」<sup>(51)</sup> 乳母はこの服の着用により、ヴェブレンのいう代行的消費の役目を果していたのである。

しかし、表Ⅵの階級区分からすると、住込乳母を雇うブルジョアジーの多くは大ブルジョアジーであり、中産階級は、自分で育てない場合は田舎の乳母に子供を預けるのが一般的だった。下女より高い給金と、子供の健康のために食・住の優遇が必要な住込乳母を、プチ・ブルジョアが雇うことはできなかった。従って、召使に関しては、下女はブルジョアであることの最低必要条件であったが、住込乳母は料理女、下男等他の召使同様、より上位のブルジョアであるための条件であったといえる。

### III. プチ・ブルジョアの服飾および新しい衣類供給方法の発展

#### (1)

先に表Ⅱで見たように、プチ・ブルジョアの衣料費は裕福なブルジョア

のそれに比較すると大差があった。また、労働者とは、家計費中の比率は同じだが、プチ・ブルジョアが衣服にかける額はかなり多くなっていた。これは、他の方法と同様に、服装が見栄の優れた一手段であることを示すものである。そして、「あらゆる階級が服装のためにまねく金銭支出の大部分は、身体の保護のためよりも、むしろ尊敬される外観のためにおこなうものであるという常識に同意することは、なにびとにとっても少しも困難でなからう。」服装はまた、見栄の他の方法以上に、次のような長所をもつ。「それは、われわれの服装は、いつでもはっきりとわかるものであって、われわれの金銭的な地位を、あらゆる観察者にたいして、一目で示す、ということである。」優雅な衣服は、高価という点および労働に不適という点で、衒示的消費・衒示的閑暇の効果がある。特に、女性の衣服についてはそれが一層あてはまる。コルセット、ハイ・ヒール等の付属品だけでなく、女性服の象徴ともいえる広がったスカート自体が、労働からの隔絶のしるしであった<sup>(52)</sup>。

男性服は、旧制度下では女性服と同様、華美で奢侈を極めたものであったが、大革命を経て、一見地味なものへと移り変ってゆく。商工業ブルジョアを中心勢力とする19世紀社会では、男性においては、労働の美德が閑暇にとって代わり、この変化が新しい男性服、つまり現代服の基礎となる、機能性重視の統一的な服装の出現を促したのである。ルダンゴト、アビ、シルクハット、パンタロンが、男性の一種の制服となり、またブルジョアのしるしとなっていた。

布地や仕立て、装飾品の面では、依然、富を誇示することができ、実際、人々はそうしていたが、閑暇の象徴であることをやめた男性服に代わり、女性服には、より一層、閑暇と消費能力を衒示する役割が与えられた。夫・父・愛人など男性の金銭的能力や社会的地位を示すことが、従来以上に要求され、「着用者である女性は、男性にとって一種の看板となった」<sup>(53)</sup>のである。

一方、当時のパリには、服装の見せびらかしを助長する要因が溢れていた。さまざまな娯楽が普及し、その場所は見せびらかしの舞台となったのである。数多くのカフェやダンス・ホール、ガス灯の照明効果がついた大通りでの「ぶらつき族」boulevardiers の散策、各国・各地方から人を集めた万国博覧会の開催、ブローニュの森・ヴァンセンヌの森での散歩や遊び……<sup>(54)</sup>。これらにおいて、娯楽そのものを楽しむと同時に、「見せ、見られ、見ることもひとつの喜びであった。第二帝政のパリは、こうして「まなざしの文化」を確立したといえるかもしれない<sup>(55)</sup>。また、オムニブスや鉄道等交通手段の発達、人々の行動範囲を広げ、移動のテンポを速め、人との接触の機会を増加させていた。

この状況のなかで、人の視覚に直接訴える服装は、見せびらかしの最適手段となる。19世紀半ばに一世を風靡した「クリノリーヌ」crinoline は、最もその目的に合致したものであった。数枚の下スカート、後には鋼鉄製の輪骨でできたペチコートの上につけられる円周の大きなスカートは、その大きさゆえに必然的に人目をひくことができる。また、着用者が動くたびに邪魔になり、あらゆる労働を困難にする点で、閑暇の刻印となった。しかも、スカートの表面をおおう数々の装飾——リボン、レース、「ひだ飾り」volants、生花または造花、宝石等——は、高級な布地とともに富を誇示するもので、なかでも、ひだ飾りの数は階級の高さを象徴するともいわれた。

このクリノリーヌを代表とする第二帝政の豪華な服飾品は、繊維産業を刺激し、かつ、フランス政府の、すなわち皇帝の力とその社会の繁栄を他国に示す、いわば国威宣揚のために、個人の領域だけでなく、公的にも意味のあるものであったらしい。モードをリードする大ブルジョアジーや貴族の女性あるいは「ドゥミ=モンドーヌ」demi-mondaines の先頭に立ち最高に贅を極めた衣裳をまとうウージェニー皇妃は、それらを「政治的衣裳」robes politiques<sup>(56)</sup> と呼んでいたという。

大革命後、法による服装規制が廃止され、解放気分が円熟したこの時代、クリノリーヌはあらゆる階級に普及し、あまりの大衆化は多くの非難を招くことにもなった——妻のぜいたくから破産する家が出るとか、不衛生・火事の原因になるとか、万引を容易にする等——。しかし、それにもかかわらず、流行の絶頂期には、フランスにおける鋼鉄製クリノリーヌの年間製造量（1858—64年）は、トンプソンとプージョの工場を中心に、480万个、2,400トンにのぼった<sup>(57)</sup>。この数字はクリノリーヌの流行の著しさを物語るものであり、また、ドーミエの作品ははじめ多数残っている諷刺画もクリノリーヌ大流行の証拠である。まさに、クリノリーヌは、服装面で第二帝政を象徴するものだといえよう。

見せびらかしが一般的風潮となり、服飾品がその重要手段となっていた社会では、上層階級に比べて、円周の大きさや装飾の量、布の質等は劣るにせよ、少なくとも流行に従い、上流階級と同じように装うことは、ブルジョア的外観を保つのに必要であった。小売商店や小企業で、実際には夫を助けて働く妻であっても、日曜だけは流行の服で着飾り、閑暇と夫の消費能力を示し、夫の信用を高めるのが務めであった。一方、男性もブルジョアであるために、前述した「制服」を着る。商人やカフェのボーイ、食料品屋の店員でさえ、民衆の象徴である「上っ張り」blouse を捨て、シャツがなければ紙製のプラストロンを代用してまでアビを身につけるのであった<sup>(58)</sup><sup>(59)</sup>。ブルジョアであるからには、その服装規範に従い、「りっぱな男性」homme comme il faut, 「りっぱな女性」femme comme il faut であることが必要だったのである。こうして、「りっぱな身なり」で日曜日の散歩に出るプチ・ブルジョアの一家族が、ドーミエによって描き出された。「年収はおそらく4,000フランくらい……、一家すなわち企業と家族の代表であるこのバダンゲー氏は、胸に金鎖の懐中時計を飾り、白いフランネルのチョッキの上に英国製の燕尾服を装い、シルクハットをかぶらないで外出したことはない。……足の爪先までブルジョアらしさを誇張する膨

らんだ柔かいスカートや、レース襟つきの華麗なカシミア織のショールを着飾り、耳もとに花をあしらい愛らしいスカーフに髪を装う、彼の貞淑な妻が右脇につき従っている。……」<sup>(60)</sup>

しかし、一方では、プチ・ブルジョアは衣生活でも当然儉約を怠らなかった。「役人たちは、必要からか習慣からか、勤め先に着くとすっかり着替えるか、少なくとも、摩擦による傷みを防ぐために腕に袖カバーを巻く。」<sup>(61)</sup> 主人の着古しを召使に与え、ひとつの服をできるかぎり長く使用するのには当然であり、日常着と日曜日の服つまり晴着とを区別することもしばしばであった。

当時の服の値段と家計費中の衣料費を比較してみると、たとえば、最良の仕立屋の夜会服一式は400フランであり<sup>(62)</sup>、仕立屋製の黒のアビ（ロトシルド男爵着用）は180フラン、一見それと変らない既製服は35フラン<sup>(63)</sup>、また、仕立屋製の午後用クリノリーヌ服が500～1,000フラン<sup>(64)</sup>であって、これらに対し、表Ⅱのプチ・ブルジョアを例にとれば、衣料費は年額1,000フランである。プチ・ブルジョアにとって、ぜいたくは決して許されるものでなく、仕立屋の高級服の購入は限られていたと推察できる。多くのプチ・ブルジョアは、一方で節約に励み、一方でブルジョアの外観を保つために、高級品ではなくても流行の品を安価に入手する必要に駆られていた。少ない衣料費をうまく使うことは、プチ・ブルジョアの主婦の重要な務めだったのである。

## (2)

当時の人々が衣類を入手するには、(1)古着屋を利用する (2)自分で布地を購入し、仕立屋に持参して作らせる (3)布地の販売から仕立まで一括して行なう高級仕立屋に注文する、という3つの方法があり、一般的に、(3)は上層階級の、(1)(2)が中産階級や民衆の用いる方法であった。しかし、(2)は(3)ほどではなくとも費用がかかるものであり、(1)はすぐ着られる便利さはあるが民衆と混同される原因になった。これらの問題を解決するかのよ

うに、時代がすすむにつれて、徐々に衣類の新しい供給方法が出現し発展を遂げてゆくことになる。

1824年、「ベル=ジャルディニエール」 Belle Jardinière という既製服取扱店が、ケ=オ=フルール (Quai aux Fleurs) に現われる。小間物商であった設立者 ピエール=パリソ は、製造面では作業分担、販売面では定価の表示という革新的方法を採用し、民衆向けの身体にぴったり合う必要のない仕事着を専門に扱うことから始めた。だが、需要の大きさを確かめるとパリソは、ブルジョアの日常着にも手を広げてゆく。それによって不安におとされた仕立労働者たちの妨害をひきおこすほど成功は華々しく、以後パリソは店の拡張に着手し、50年代半ばには店舗数25、資本金 300万フランにまで達した。さらに支店による地方進出も図り、19世紀後半には店はますます繁昌してゆくことになる。

パリソの成功は当然同業者の出現を促すことになった。たとえば、1830年頃には、ラシャ卸商のテルノーがヴィクトワール広場に、自家製造の布を用いたあらゆる種類の服を販売する「ボノム=リカール」 Bonhomme Ricard を開店する。同時期、クロワ=デ=プティ=シャン通りの「メゾン=クタール」 Maison Coutard は、労働者階級だけでなく、優雅で洗練された階級にも既製服を広めようとしていったのである<sup>(65)</sup>。

ベル=ジャルディニエールはじめ、これらの店の繁栄は、時間と費用を要する仕立服にかえ、古着でない完全に仕上がった新しい服を、しかも安価に提供するという進取的な考えに依るものであった。特に、ベル=ジャルディニエールの商品の安さは定評があり、たとえば、ジャンパー風上着 4.75フラン、ズボン 5～20フラン、ルダンゴト 60フラン<sup>(66)</sup>、また、5.75フランあれば上から下まで完全に身なりを整えられたともいわれる<sup>(67)</sup>。

既製服は以上のように、当初は労働者向けであり、男性服が主であったが、型紙・裁断法・サイズ等の技術改良を経て、女性既製服の製造も1845年頃から本格的になる。技術発展に伴い、既製服は客層を広げ、それまで

は仕立屋の客であった  
 多少裕福で財産のある  
 人々をも吸収すること  
 になった<sup>(68)</sup>。既製服  
 の人気上昇と成功は、  
 販売店数と売上高の急  
 増に表われている

表Ⅶ パリの既製服販売店数と売上高

年	店数	売上高 (単位 100万フラン)
1846	190	30
1849	180	25
1855	270	42+2 (軍隊用)
1860	322	50+6
1866	420	100+9

P. Perrot, *op. cit.*, p. 145.

(表Ⅶ<sup>(69)</sup>参照)。

他方、「マガザン=ドゥ=ヌヴォテ」magasins de nouveautés という小売店も19世紀前半、多数現われた。「コワン=ドゥ=リュウ」Coin de Rue, 「ヴィル=ドゥ=フランス」Villes de France, 「プティ=サン=トマ」Petit Saint Thomas, 「グラン=コンデ」Grand Condé, 「ポーヴル=ディアール」Pauvre Diable, 「ヴィル=ドゥ=パリ」Ville de Paris, 等である<sup>(70)</sup>。これらマガザン=ドゥ=ヌヴォテは、その名が示すように、繊維製品はじめ数種の流行服飾品を扱う店であったが、安価で色彩豊かな布地や小間物に加え、次第に普段着用既製服も揃えるようになっていった。これらの店の、一般の店 (boutiques) とは違った様相に注目しなければならない。後者は暗くて狭い煤けた店内で、ほとんどショーウィンドーもなく、何の意匠もこらさず布をたたんだまま営業していたのに対し、マガザン=ドゥ=ヌヴォテには、照明、広い空間、ガラス、広げて陳列された商品が溢れていた。さらに、これらの店は、従来の値段のかけひきや高利の信用貸しに代わる、定価表示・低価格・現金支払いという新しい販売方法を採用した。他店との競争のため、宣伝・広告にもはじめて着手する<sup>(71)</sup>。客にとって、値段交渉時の精神的圧迫からの解放や、目の前に展示された安価な商品を黙っていても見られる気安さは、衣類購入を容易にするものとなった。

こうした革新的販売方法は、マガザン=ドゥ=ヌヴォテをある程度の繁栄に至らせた。しかしながら、19世紀前半においては、依然として職人的・

前資本主義的性格が強く、輸送手段も充分発達していなかったという状況や、大通りの開通以前でパリの町並みには閉鎖的雰囲気があった<sup>(72)</sup>、などの理由から、マガザン=ドゥ=ヌヴォテのなかには、次第に衰退の道をたどるものが増加した。代わって、世紀後半に登場するのが、いわゆる「百貨店」grands magasins である<sup>(73)</sup>。

世界初の百貨店といわれる「ボン=マルシェ」Au Bon Marché は、当初、ヤヴル通りとバック通りの角に創設された一マガザン=ドゥ=ヌヴォテであった。創立者はヴィドーであったが、前述したプティ=サン=トマの売場主任アリスティド=ブシコが1852年、経営に参加する。のち、ヴィドーは経営から抜け、ブシコが、かつて洗濯女であった妻マルグリットとともに、多大の努力と苦心の末、その店を「百貨店」として成功に導いていたのである。1852年50万フランであった売上高は、62年700万、69年2,100万と急速に伸び<sup>(74)</sup>、それにつれて、12人で始まった従業員も大幅に増加している<sup>(75)</sup>。

一方、ポーヴル=ディアーブルの元店員ショシャールと、ヴィル=ドゥ=パリの元絹売場主任エリオの創設した「ルーヴル」le Louvre (1855年)も、1875年から95年までの20年間で、売上げは4,000万フランから1億2,000万フランに伸びた。また、「サマリテーヌ」la Samaritaine (1869年)の創立者はコニャック=ジェ夫妻で、二人ともマガザン=ドゥ=ヌヴォテあるいは別の百貨店で店員の経験があった。この店の発展も著しく、1872年の売上高30万フランから10年後には600万フランになっている。<sup>(76)</sup>他に、「プラントン」le Printemps (1865年)、「ギャルリー=ラファイエット」les Galeries Lafayette (1889年)も創設され人気を集めた。

百貨店がこのように相次いで出現し、しかも各々が非常な成功を遂げたことには多くの要因が考えられる。経済成長に伴う国民所得の上昇、オスマンによるパリの大改造、市内の交通網の発展、首都の人口増加（パリ人口は1846年の105万4千人から1861年の169万6千人に急増）、鉄道等輸送

手段の発達，さらに安価な製品販売の前提として，繊維をはじめとする諸工業・既製服製造の発達等である。

しかし，これらの有利な外的要因に加え，百貨店自体が多くの人々の求める魅力を備えていた点は重要である。百貨店は顧客の要求をすばやく理解し，それに応えるべく努力を重ねていた。ひとつは，マガザン=ドゥ=ヌヴォテが衣料品を中心とした商品だけにとどまっていたのに対し，百貨店はその本来の特徴である商品の多様化によって，売上げの増大と規模の拡張をめざし，客には便利さを提供したことである。70年代までの商品は，流行品，下着類，既製服，レース，毛皮，アクセサリ，絨毯，寝具等であったが，以後，家具，食器類，玩具等も徐々に加えられた。販売方法においては，マガザン=ドゥ=ヌヴォテの方法を一層充実させる。価格表示はいうまでもなく，返品可能制，バーゲンセール，地方への通信販売，自由閲覧制の徹底化——これによって，店に入った以上は買わねばならないという道徳的義務感を不要にする——，購買欲を高める売場の配置，「鉄の階段」（後にはエレベーター）・食堂等諸設備の充実であった<sup>(77)</sup>。

こうして，既製服の発達と新型店舗の出現は，中産階級を中心に，「次第に家計を管理するようになり」，「今後夫の身分と地位を示さねばならなくなった」<sup>(78)</sup> 女性たちのそれまでの不満を解消し，「御婦人がたの幸福のために」<sup>(79)</sup> 貢献することになったといえよう。世紀前半には全盛をほこっていた古着屋と小仕立屋を衰退させながら<sup>(80)</sup>，両者の長所をうまく結合させた「既製服が，百貨店を通して普及し，その市場を拡大していったことには何の驚くべきこともなかったのである。」たとえば，ウォルトのよような有名な仕立屋の，一着700～1,200フランもする夜会服に身を包み，アクセサリをふんだんにつけて外出するという，「優雅な女性」のぜいたくは決してプチ・ブルジョアのものにはならなかったが，既製服と百貨店は，高級仕立服と競合しつつ，「外見重視」と「ぜいたくの趣味」goût du luxe が風潮となっていた時代に，——ジラルルの表現を借りれば——「ぜ

いたくの民主化」*démocratisation du luxe* に貢献していたのであった<sup>(81)</sup>。

一方、創立者のほとんどが、かつては一介の店員という下層身分の者で、労働者や中産階級の生活の直接の観察者であったこと、百貨店が服飾品の販売に端を発するものであったことを考えあわせると、「百貨店」という現代に至る大規模商店は、19世紀中産階級の衣生活における要求からうまれたプチ・ブルジョア的産物だといえる。

最後に、「人造宝石」*strass*、模造皮革、「電気メッキの金属」*ruolz*、多くの貧しい「造花女工」*fleuristes* の手をへてうまれた精巧な造花などの数々のイミテーションが、世紀後半には人気を呼んでいたことも付加しておきたい。それらは、高級品をモデルとした大量生産の既製服同様、まず第一に中産階級の人々に恩恵を与え<sup>(82)</sup>、その流行は「模倣の時代の最初のあらわれのひとつ」<sup>(83)</sup>であった。この模倣と「まがいもの文化」<sup>(84)</sup>もまた、外見だけでも上流階級と同じでありたいと望む、中産階級の見栄の所産であったといえるだろう。

## おわりに

本稿では、19世紀パリ社会におけるプチ・ブルジョアの生活とその意識のあり様の一端を、主として、召使雇用と衣生活の問題に焦点を当てることで探ってきた。

プチ・ブルジョアは、他のブルジョアに比べて収入や財産が少なく、一般に職業レベルが低いために、ブルジョアジーの最下層に位置づけられ、ドーマールの分類の「民衆的ブルジョアジー」という語が示すように、特に下限においては民衆との混同・同化がなされる曖昧な状態にあった。プチ・ブルジョアは、見栄のために下女を雇い、安価な既製服であろうと少なくとも流行の服を身につける。しかし、そうした態度は、見栄という以上に、上位のブルジョアジーや貴族そして民衆という他の階級に対して、自分たちの存在を確固としたものにするための必要不可欠な手段だったの

である。流行の衣裳や下女は、まさにプチ・ブルジョアのステイタス・シンボルの一部となっていた。「ブルジョアである」という強い意識や、「ブルジョアである」ことの認可を得るために、彼らが日常生活で払った努力は、何よりも、プチ・ブルジョアをブルジョアジーの一員とするものであったといえるだろう。

その存在は不安定ではあったがそれだけではなく、また、上流階級の模倣や見栄というその行動が、非生産的なものに終わってしまわなかったことは、たとえば、新しい衣類供給方法すなわち既製服や百貨店が、中産階級の人々を主対象とし、その要求に応えるべく、この階級のメンバーや民衆出身者によって創出されたという点に顕現している。たとえ、階級の見栄から出たものとしても、生活の向上をめざすプチ・ブルジョアの意欲は確かに、近代的な経済発展の一原動力の役目を果たしたのであった。

なお、本稿では略述だけに終ったり、全く触れることのできなかった、食生活・住居・娯楽のあり方・家具および室内装飾・宗教意識等他の多くの問題については、今後の研究課題とし、さらに多方面から19世紀の人々の生活を探ってゆきたいと思っている。

#### [注]

- (1) Maurice Allem, *La vie quotidienne sous le second Empire*, Paris, 1948, p. 95.
- (2) Adeline Daumard, *Les bourgeois de Paris au XIX<sup>e</sup> siècle*, (以下 *B. P.* と略記), Paris, 1970, pp. 93-101; Fernand Braudel et Ernest Labrousse (éd.), *Histoire Economique et Sociale de la France*, tome III, Vol. 2, (以下 *H. E.* と略記), Paris, 1976, pp. 892-895, (第3部第3～6章はドーマール担当)。
- (3) ドーマールは、相続財産申告・埋葬料支払いの有無, 家賃額, 選挙資格の有無, 奉公人雇用家庭の比率等の調査から, 赤貧者・貧困者の人口中の比率を  $\frac{3}{4} \sim \frac{4}{5}$  と算出した (*H. E.*, pp. 855-859; *B. P.*, pp. 17-27). 従って, 貧困よりは勝る状態に位置するブルジョアジーは貴族とともに, 残りの  $\frac{1}{5} \sim \frac{1}{4}$  を占めるにすぎなくなる。
- (4) ジャン=ロム (木崎喜代治訳) 『権力の座について大ブルジョアジー』岩波書店, 1971年。

- (5) J. ロム, 前掲書, 62ページ。
- (6) J. ロム, 前掲書, 2 ページ。
- (7) A. Daumard, *B. P.* p. 96; A. Daumard, *H. E.*, p. 893.
- (8) A. Daumard, *H. E.*, pp. 901-902.
- (9) Georges Dupeux, *La société française 1789-1970*, Paris, 1972, p. 128; A. Daumard, *H. E.*, p. 877.
- (10) Jean-Pierre Rioux, *La révolution industrielle*, Paris, 1971, p. 205.
- (11) ドーマールは, 19世紀前半について, 2千~2万フランの財産所有者をプチ・ブルジョアと考えている。(A. Daumard, *B. P.*, p. 43.)
- (12) Pierre Bleton, *La vie sociale sous le second empire*, Paris, 1963, p. 20. ブルトンは, 19世紀の作家セギュール夫人の一連の作品を研究し, 第二帝政の社会生活について, 一資料を提供している。
- (13) *ibid.*, p. 77.
- (14) A. Daumard., *H. E.*, p. 867.
- (15) これは, Régine Pernoud, *Histoire de la bourgeoisie en France, 2. Les temps modernes*, Paris, 1981, p. 361 に引用されている。
- (16) Anne Martin-Fugier, *La place des bonnes*, Paris, 1979, p. 91.
- (17) 結婚の重要性については, G. Dupeux, *op. cit.*, p. 129 および A. Daumard, *H. E.*, p. 903 参照。
- (18) R. Pernoud, *op. cit.*, pp. 382-383.
- (19) 子供数の制限現象については, R. Pernoud, *ibid.*, p. 389, および A. Daumard, *H. E.*, p. 910, p. 912 参照。19世紀前半では, たとえば, 店主の30%が子供1人, 子供0人と子供2人が20%ずつであり, 卸売商人では2人が最高で30%近くになる。ちなみに, 労働者については, 子供0人と1人が30%ずつ, 2人が15%であり, この場合は貧困が子供数増加にブレーキをかけていると思われる。一方, 上層階級の裕福な事業家では2~4人が60%を超え, 子供数が多くなる。(以上, ドーマール。) 第二帝政のブルジョア家庭では2人が最も多い。(P. Bleton, *op. cit.*, p. 96.)
- (20) R. Pernoud, *op. cit.*, p. 361. 前述したように, 1830年頃について労働者家族の最低必要経費は860フランであったが, 家族メンバー各々の年収が夫450フラン, 妻180フラン, 子供2人で130フランでは合計760フランにしかならない。
- (21) ソースタイン=ヴェブレン (小原敬士訳) 『有閑階級の理論』岩波文庫, 1961年, 28-101ページ。
- (22) A. Daumard, *B. P.*, p. 351.
- (23) A. Daumard, *B. P.*, p. 18, p. 23.
- (24) Alain Plessis, *De la fête impériale au mur des fédérés 1852-1871*, Paris, 1973, pp. 168-169.

- (25) P. Bleton, *op. cit.*, p. 76.
- (26) A. Martin-Fugier, *op. cit.*, p. 91. この例は, Léon Frapié の小説 *La Figurante*, 1908 に登場する家族である。フィクションではあるが, 重要な一資料としてマルタン=フュジエは随所でとりあげている。
- (27) A. Daumard, *B. P.*, p. 70.
- (28) A. Daumard, *Maisons de Paris et propriétaires parisiens au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1965, p. 255.
- (29) A. Daumard, *B. P.*, p. 69. 中小ブルジョアジーに多い商店主について, ドーマールは, その住居はあまり良くなかったと指摘する。また, パリと田舎にそれぞれ住居を持つのは, 上層階級には不可欠であったが, 別荘所有は, プチ・ブルジョアには一般的でなかった。( *ibid.*, p. 73.)
- (30) 当時の住宅事情の悪さ, 民衆の住居の貧しさについては, Louis Chevalier, *Classes laborieuses et classes dangereuses*, Paris, 1958, pp. 215-234 ; Louis Girard, *Nouvelle histoire de Paris—la deuxième République et Second Empire*, Paris, 1981, pp. 185-188, 等参照。J. Bruhat, *L'affirmation du monde du travail urbain*, (*H. E.*, p. 798) によると, 貧窮者の平均家賃額は, 1856年で113フラン, 1866年で141フランであった。
- (31) T. ヴェブレン, 既出書, 64ページ。
- (32) A. Daumard, *H. E.*, p. 859.
- (33) A. Martin-Fugier, *op. cit.*, p. 36.
- (34) 以上, *ibid.*, pp. 92-94.
- (35) *ibid.*, p. 36.
- (36) *ibid.*, p. 35. マルタン=フュジエは, M. Cusenier, *Les domestiques en France*, 1912 により, この表を作成している。
- (37) A. Daumard, *B. P.*, p. 71.
- (38) P. Bleton, *op. cit.*, p. 69.
- (39) Fanny Fay-Sallois, *Les nourrices à Paris au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1980, p. 265 からの抜粋。
- (40) 下女の仕事の厳しさ, 住い等については, A. Martin-Fugier, *op. cit.*, pp. 95-136 ; A. Martin-Fugier, *La bonne*, dans Jean-Paul Aron (éd.), *Misérable et glorieuse, la femme du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1980, pp. 27-40 を参照。
- (41) A. Martin-Fugier, *La place...op. cit.*, p. 94.
- (42) *ibid.*, p. 106.
- (43) Jean-Pierre Gutton, *Domestiques et serviteurs dans la France de l'Ancien Régime*, Paris, 1981, p. 9.
- (44) F. Fay-Sallois, *op. cit.*, p. 57.
- (45) *ibid.*, p. 57. 田舎の乳母にであれ, 住込乳母にであれ, 事務所を通さず直接

子供を預けた場合、その子供数を正確につかむのは困難であった。1860年代後半について、数人の研究者は、5,000人、9,500人等の数をあげるが、確かではない。

- (46) *ibid.*, pp. 81-85 ; pp. 89-93.
- (47) *ibid.*, pp. 262-263, 乳母の給金にはかなり幅があるが、1860年において、田舎乳母は月額15~50フラン、住込乳母は35~60フランであった。
- (48) これは、*ibid.*, p. 70 に引用されている Dr Monot (*De l'industrie des nourrices*, 1867) の言葉である。
- (49) F. Fay-Sallois, *ibid.*, p. 70.
- (50) *ibid.*, p. 244.
- (51) *ibid.*, p. 211. これは, Cusenier, *op. cit.* からの引用に依る。
- (52) T. ヴェブレン, 既出書, 161-181ページ。
- (53) Philippe Perrot, *Les dessus et les dessous de la bourgeoisie*, Paris, 1981, pp. 63-64.
- (54) 娯楽については, M. Allem, *op. cit.*, pp. 189-233 ; Pierre Guiral, *La vie quotidienne en France à l'âge d'or du capitalisme 1852-1879*, Paris, 1976, pp. 187-216 にくわしい。
- (55) 小関三平「享楽のミリュール」(河野健二編『フランス・ブルジョア社会の成立』岩波書店, 1977年, 所収論文) 375ページ。なお, 近藤昭『道化の芸術家ドーミエ』新潮社, 1980年, 156ページには, 「見せ, 見られ, 見られていゝ自分を見る現代性風俗のはしり……」という表現が見られる。
- (56) M. Allem, *op. cit.*, p. 145.
- (57) P. Perrot, *op. cit.*, p. 132.
- (58) P. Bleton, *op. cit.*, p. 20.
- (59) 以上までの, 当時の服飾に関する一般的事柄は, François Boucher, *Histoire du Costume—en Occident de l'antiquité à nos jours*, Paris, 1965 の各所に依る。
- (60) 近藤昭, 既出書, 145-146ページ。
- (61) P. Guiral, *op. cit.*, p. 263.
- (62) P. Bleton, *op. cit.*, pp. 34-35.
- (63) この値段は, Henriette Vanier, *La mode et ses métiers—Frvolités et luttes des classes 1830-1870*, Paris, 1960, p. 168 に引用された『フィガロ紙』*Figaro* の記事に見られる。
- (64) P. Perrot, *op. cit.*, p. 131.
- (65) 以上について, P. Perrot, *ibid.*, pp. 93-94, 辰馬信男「フランスにおける百貨店の成立と発展」(中央大『商学論纂』22巻4-6号所収論文, 1981年)。174-175ページ。

- (66) H. Vanier, *op. cit.*, p. 170.
- (67) P. Perrot, *op. cit.*, p. 93.
- (68) *ibid.*, pp. 95-96.
- (69) *ibid.*, p. 145. この表は, Dusautoy, *Rapport du Jury international de l'Exposition de 1867*, p. 28 から引用されたものである。
- (70) 辰馬信男, 既出論文, 173-174ページ, および P. Perrot, *op. cit.*, p. 104.
- (71) P. Perrot, *ibid.*, pp. 96-97.
- (72) *ibid.*, p. 98.
- (73) L. Girard, *op. cit.*, p. 228 で, ジラールは「百貨店」に関し, その萌芽はすでに王政復古期のバザールに見られるといい, 第二帝政がその出現時期であるという説には疑問を持っているようである。しかし, 本稿では「ボン=マルシェ」を百貨店第一号とする, 一般的な説に従っておく。
- (74) R. Pernoud, *op. cit.*, p. 427. ただし, Georges d'Avenel, *Les grands magasins in La Revue des Deux-Mondes* n° 4, 1894 に主に基づいている辰馬信男(既出論文182ページ)と, P. Perrot (*op. cit.*, p. 143) では, 1852年の売上げは45万である。
- (75) 辰馬信男, 前掲論文, 183ページ。1852年12人→69年400人→77年1,788人→82年2,500人→87年3,173人。
- (76) ルーヴルおよびサマリテーヌの売上高については, 辰馬信男, 前掲論文, 184-185ページ; 松田慎三『新訂デパートメントストア』日本評論社, 1939年, 18ページ。
- (77) 百貨店における販売方法, 商品の多様化, 諸設備等については, P. Perrot, *op. cit.*, pp. 111-118. 返品可能制はブシコがはじめて採用した。(P. Perrot, *ibid.*, p. 117; 松田慎三, 坂倉芳明『百貨店』有斐閣, 1960年, 24-25ページ。)
- (78) P. Perrot, *ibid.*, p. 118.
- (79) Emile Zola, *Au bonheur des dames*, 1883. これは「ボヌール=デ=ダム」という百貨店を舞台とした小説である。当時の百貨店のありよう, 客や従業員の様子等について多くの点で参考になる。特に, 冒頭部分では従来の小売店と百貨店の対比的なようすがみごとに描かれている。また, ライバル店として, ボン=マルシェが登場している。
- (80) P. Perrot, *op. cit.*, pp. 125-128.
- (81) L. Girard, *op. cit.*, p. 229; pp. 307-327.
- (82) *ibid.*, p. 228.
- (83) P. Perrot, *op. cit.*, p. 130.
- (84) 小関三平, 既出論文, 374ページ。